




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2875 号	氏名	井上 茂
審査担当者	主 査	山田研太郎	 (印)
	副主査	山下 裕史朗	 (印)
	副主査	森 水 五	 (印)
主論文題目 : Predictors of abnormal glucose tolerance in the early postpartum period in patients with gestational diabetes (妊娠糖尿病の産褥早期に耐糖能異常を示す予測因子についての検討)			

### 審査結果の要旨 (意見)

妊娠糖尿病の診断基準の改変に伴い妊娠糖尿病と診断される妊婦が約 4 倍に増加した。妊娠糖尿病は糖尿病発症のハイリスク群ではあり、産褥期の耐糖能フォローアップが糖尿病の発症予防と早期発見の観点から重要である。しかし、妊娠糖尿病女性のフォローアップ受診率は、病識の欠如や育児等のため低いのが現状である。本研究は妊娠中に実施した 75g 経口ブドウ糖負荷試験のデータから、産褥早期の耐糖能異常を予測する因子を統計学的手法を用いて抽出し、空腹時血糖値 $\geq 92\text{mg/dl}$  かつ負荷 60 分後血中インスリン値 $< 100\mu\text{U/ml}$  が有意の予測因子であることを明らかにした。この基準を適応することで、妊娠中から産褥耐糖能異常のハイリスク症例を選択することが可能になり、妊婦健診や分娩時入院の際に、基準を満たす妊娠糖尿病妊婦に対して産褥フォローアップの必要性や糖尿病発症予防について重点的にカウンセリングを行うことができる。したがって、本論文は妊娠糖尿病女性の産褥フォローアップ受診率の改善と糖尿病の早期発見・早期介入に寄与しうると期待され、臨床的意義が高いと考えられる。

### 論文要旨

既往妊娠糖尿病女性は将来の糖尿病発症率は非常に高いが、産後のフォローアップの受診率は低い。産後の耐糖能異常症例を妊娠中から予測し妊娠中から介入することで受診率改善が期待される。耐糖能異常を妊娠中から予測するために、それらの臨床的特徴についての検討を行った。

2005 年 10 月～2013 年 9 月に新基準で妊娠中期に妊娠糖尿病と診断した 155 症例を対象とし、産褥 5～7 週の 75gOGTT の結果が正常型の 113 例 (改善群)、境界型もしくは糖尿病型の 42 例 (耐糖能異常群) の 2 群に分けた。妊娠糖尿病診断時のパラメーターから耐糖能異常を予測するプロファイルを用いて抽出し、プロファイルにより耐糖能異常の割合が異なるかどうかロジスティック回帰分析にて解析した。

妊娠糖尿病診断時の 75gOGTT で空腹時血糖値 $\geq 92\text{mg/dl}$  かつ負荷 60 分後血中インスリン値 $< 100\mu\text{U/ml}$  の症例は、産褥 5～7 週に耐糖能異常をきたす可能性が有意に高かった( $p < 0.0001$ )。

負荷 60 分後インスリン分泌能が悪い症例では産褥早期に耐糖能異常を呈することが示唆され、将来の糖尿病発症率が高いことを妊娠中から十分に説明する必要がある。